たましい

髙野敦志



たましい
あとがき

目次

たましい

髙野敦志

　長い梅雨がようやく明けた。突き抜ける青さが、まばゆい太陽と競い合っている。地の底から湧き出る響きで、アブラゼミが鳴き始めると、ヴェールに包まれたみたいに、辺りは現実感が乏しくなる。東側の窓から見える丘には、ひときわ目立つ杉の大木が生えており、辺りの集落の営みを見守っていた。あれは山の神さまなんだと、小学四年生の貴志たかしは思った。
　林の先には畑に囲まれた草地が広がっていた。古代人の集落があったらしく、ところどころ塹ざん壕ごうのような窪地があって、近所の子供たちの遊び場になっていた。玩具おもちゃのピストルやプラスチックの刀を振り回したり、煙草の紙で包んだチョコレート

をくわえて、ギャングの仕草を真似したり。
　ただ、貴志は喘ぜん息そくを患っていたために、体調のいいときにしか男の子と遊ぶことができなかった。ちょっと追いかけっこするだけで息切れがして、胸の奥からすきま風みたいに、ヒューヒュー音がしてしまうからだった。
　苦しくなると、草地に手をついて息が楽になるのを待った。そんな貴志をほかの男の子は置き去りにした。一人きりになると、仰向けに大の字になって青い空を見た。まぶしくて目が開けていられない。瞼まぶたの裏側が赤く染まった。暖かくて気持ちいい。ぼくは生まれたんだ。でも、どうして生まれたんだろう。気がつくと、この世界にいたんだ。
　梅雨の季節の間は、繰り返し襲ってくる発作のため、息苦しさと締めつけられる胸の痛みで、貴志は泣きたい気持ちになった。気弱になるとさらに苦しさが増すので、寝室にこもって肩を揺らしながら、じっと耐えているしかなかった。
　忌いまわしい梅雨の季節が明けたので、秋風が吹き出すまでの束の間は、貴志もほかの子供のように健康な体が与えられるのだった。遊び回って疲れた体は、横になるとすぐに眠れる。目覚めたときもすっきりしている。とはいえ、夏の朝の心地よさは長くは続かない。
　夏休みの間は、中学校の教師をしてる吉野英夫は、うちにいることが多かった。貴志は大柄な父のことを、いつも怖いと思っていた。面と向かってしかられることは少なかったが、母淑よし子ことの言い争いが絶えず、怒声が響くこともまれではなかったからだ。
　父の部屋は厚い木の戸に隔てられた、台所の奥の西側にあった。部屋中に本棚が並べられており、古い本と煙草の臭いが混じり合って、壁や襖ふすまに染みついていた。父は家にいる間は、本を読んだり詩を書いたりしていた。万年筆で書かれた達筆の詩は、読んでもさっぱり分からなかった。難しい漢字は父の教養を証あかしていた。
　詩よりも物語の方が好きだった。母にわら半紙を買ってきてもらい、鉛筆とクレヨンでお話を作っていた。月一回世界の名作が届け

られると、その日のうちに読んでしまった。次の物語が届けられるのが待ち遠しくて、配本の紹介文からどんな物語であるか、自分で想像して書いてみたりした。発作が起きそうな日はうちにこもって、空想の世界で遊んでいた。口数の少ない父は、そんな様子を目を細めて見守っていた。

　ただ、優しい表情を見せるのはまれで、父はいつも鋭い目つきで、怒りを内に込めた顔をしていた。貴志がちょっとでも間違ったことをすると、ぎょろっと睨にらみつけるので、蛇に狙われた蛙のように、身動きできなくなってしまう。母とまだ幼稚園児の妹、美穂と三人でいるときは、なごやかな空気が流れているのに、父が帰ってきた途端、ぴりぴりした空気が張り詰めてしまうのだから。

　父はなぜ怖い人になったのか。穏やかな性格だったのが、戦争中に少年兵に志願し、海軍で人間魚雷になるための訓練を受けていたらしい。仲間の一人がたるんでいると、全員が甲板で腕立て伏せをやらされ、少しでも笛の音に遅れると、木刀で腰を力任せに叩く「精神注入棒」が待っていたとか。

　戦争が終わって復員すると、予科練に勧めた校長が、非常時に京都で遊んでいたり、民主主義の教育とやらを学ぶために、敵国アメリカに研修に行ったりしたことを知って、すっかり人間不信に陥ったとか。

　酒を浴びるように飲んだせいで、同じ職場の女性教師との恋も破れた。見合いで結婚した妻の実家には、淑子の母小金井サチがいた。村長の妹としてわがままに育ったために、気位が高くて愛想もない。手を後ろに組んで歩く姿に、近所の子供たちも怖がって逃げていく。男の子が産めなかった義母は、英夫に入り婿してほしかったらしいが。結局、英夫は小金井家を出て行った。貴志が生まれていたので、淑子はついていくことになった。

「女中と婆ばあやがいるってうちに行ったら、下男にされた」というのが父英夫の口癖だった。それ以来、父が家にいる間は、祖母サチが多摩丘陵にあるこの家を訪れることはなかった。運動会の日にやって来た日もあったが、激しい雷雨に見舞われて、雨戸を閉めて嵐が過ぎ去るのを待った。雨が上がって日が差してきたが、運動会

は中止になり、父が電話もかけずに帰ってきた。
「おい、早く開けろ！」
　その声を聞くなり、祖母の顔から血の気が引いた。あわてて荷物をまとめると、お邪魔しましたと、父と入れ代わるように帰っていった。

　昼ご飯を食べ終えると、貴志は東側の六畳に戻った。夜は母と妹と三人の寝室になる部屋に。暑さはますますひどくなった。風鈴もやんで、アブラゼミの鳴き声は、空気を加熱するほどになった。扇風機はうちに一台しかない。額に浮かんだ汗は首筋を伝って、シャツの中に染みてきた。うちわをあおぐ手も疲れた。廊下に横たわると、ひやっと体温が床に抜けていくのを感じた。夏は床の上で昼寝するのが一番だな……。
　貴志は作文の宿題を思い出した。「将来何になりたいか」というのが課題だった。物語を書いたりできたらいいな。自分が読んでもおもしろくて、他の人にも楽しんでもらえるような。父の部屋には一生かかっても読み切れないほどの本がある。あれを読んでいけば、書く方法が分かるかもしれない。何で物語を書きたいのかは、うまく説明できないけれど、あの人の子に生まれれば、そうした勉強もさせてもらえると思ったのか。
　父の部屋から何やら、母が愚痴をこぼす声が聞こえてきた。四年生にもなるのに、貴志は泳ぐこともできない。夏休みなんだから、少しは家のこともやってほしいわ。よそのお父さんは、息子をプールに連れていって、泳ぎを教えたりするじゃない？　母は一方的にまくし立てている。父の声が聞こえないのは、恐らく詩を書いてるからだろう。父が黙っていることをいいことに、母は越えてはならない一線を越えてしまった。
「貴志！　貴志！」
　突然、父が怒鳴る声がした。どきっとして息が詰まりそうになった。父を怒らせるようなことを、ぼくは何もしていないのに。貴志は廊下から飛び起きると、わけも分からず声のする方に出ていった。

「プールに行く、早く支度しろ！」
　理由を聞けるような状況ではなかった。これは父の命令なのだから。母の顔もこわばっている。どうしたらいいかと目で問いかけると、海水パンツにバスタオルを出して、出かける用意をしてくれた。貴志の耳もとで、お父さんが泳ぎを教えてくれるんだからとしか言わない。あれほどけたたましかったセミの声も、耳に入らなくなっていた。
　支度ができると、貴志は目に見えないロープで引きずられるように、父の後ろについていった。外は焼けるような日差しが照っていた。すべてが白っぽく見えてしまい、起こってることが現実だとは思えなかった。里芋の畑の間を進み、山の神さまのいる丘を抜けると、バス通りへと通じるけもの道を下っていった。
　バスを降りて市民プールに向かってる間、一言も口をきいてくれなかった。父の体が怒りのエネルギーで、今にもはち切れそうになってるのを感じた。不用意に声をかけたりしたら、路面に叩きつけられてしまうんじゃないか。まるで戦前にタイムトリップしたみたいだった。その様子を見かけた他人は、父子おやこではなく、奉公先に連れていかれる小僧かなんかに見えたことだろう。

　更衣室で着替えて、ひょうたん型のプールの前に連れていかれた。水面から塩素の臭いが立ち上ってくる。カラフルなパラソルは、照りつける日差しに白んで見えた。底が水色に塗られているため、水そのものも青みがかっている。プールサイドのコンクリートは、乾いた所が熱で焼かれた上に、表面が滑り止めでざらざらしている。幼児は足の裏が痛いのも構わず、歓声を上げて走り回っている。よその父親がひらひらのついた水着姿の少女に浮き輪をかぶせ、手をつないでゆっくり水の中に入っていく。ごく当たり前の光景が広がっているのに、貴志は自分だけが囚とらわれの身になっていると感じた。
　父が準備体操を始めたので、貴志も屈伸をしたり、片足を上げて足首を回したりした。これから水泳の特訓を受けるわけだが、逃れることはできない。おびえる目で父を見上げると、英夫はこれから

行う練習について話した。
「しょうがない奴だな。昔はな、泳げない奴は無理やり舟に乗せて、沖で海に投げ込んで帰ってくるんだ。死にたくないから、死に物狂いで泳げるようになるんだよ」
　父は予科練で鍛えられたので、大日本帝国の海軍式水練法を、息子に伝授しようとしているんだろう。そんなことして、もし本当に泳げなかったら、溺れて死んじゃうんじゃないかな。死んだら運が悪い？　そんな奴は生きてたって、お国のために役に立たないって言うんだろう。
「始めるぞ！」
　言われるままに、父に従ってプールの中に入っていった。深さは貴志の胸の上ぐらいまであった。何が始まるんだろうと思った途端、英夫はいきなり貴志の首根っこをつかんで、水の中に沈めた。水が怖いって意識をなくそうというんだろう。次の瞬間、バケツから雑巾を引き上げるように、水の上に出した。目が塩素入りの水で染みた。飛び散るしぶきで光がしずくの形に輝いた。ふたたび、首をつかむと水の中に沈める。息を吸うタイミングがずれて、鼻の中に水が入ってきた。それを父に言って、中断してもらおうと思ったが、英夫は聞く耳を持たなかった。
　首根っこをつかまれた少年は、染みついた汚れを洗い落とすみたいに、ざぶざぶ水の中に突っ込まれては、上に引き出された。あきらめの気持ちで、貴志はされるままにされていた。何でお父さんは、こんなことをするんだろう。お母さんにひどいこと言われて、八つ当たりしているのか。それとも、ぼくのことが嫌いなんだろう。生まれるときにへその緒が首にからまって、帝王切開しなければ窒息して死んでいたはずの息子、季節の変わり目には喘息の発作を起こし、青白い顔で息も絶え絶えになってる息子を、不甲斐ないと思っていたのか。虐待されているうちに、貴志の意識は遠ざかっていき、つらいとも苦しいとも思わなくなった。

　そのうち、水は怖くなくなった。顔をプールにつけて、両手で交互にかきながら、伸ばした足先を上下に動かすと、数メートル進む

ことができた。顔を水につけていれば、人間の体は浮くんだな。貴志は面白くなって、自分でひょうたん型のプールの向こうまで泳いでいった。

　ただ、息継ぎはうまくいかない。顔を曲げて水面に出すわずかの間に、息を吸うというのが。一日でそこまで覚えるのは無理だった。水が怖くなくなっただけでも、大きな進歩だと言えないか。蛙みたいに手足を動かす平泳ぎは、顔を水につけていれば前に進んだが、出しながらだと疲れて長くは続かない。

「じゃあ、横泳ぎを教えるぞ！」

　英夫は体を横にして浮かべ、合わせた手を頭と足の方にずらして泳ぎはじめた。今まで見たこともない泳ぎ方だった。言われるままに、貴志も体を横にして、水の中で手をすうっと滑らせた。何だか自分が舟になったみたいに、力を込めずに水の中を滑っていく。こんなに簡単に泳げるのに、どうして学校の先生は教えてくれなかったんだろう。

　プールサイドの監視員が笛を鳴らした。しばらく休憩時間になった。貴志に笑顔が戻ってきたので、英夫は一仕事終えたように、プールサイドで寝そべった。日は少し西に傾いたが、まばゆい光は冷えた体には優しかった。プールに来たときに漂っていた、張り詰めた膜ははじけて消えた。プールサイドを走り回る幼児の歓声が、ふたたび耳に入ってきた。

　あとは自由に過ごす時間だった。貴志が横泳ぎをしている間、英夫は気の向くままにクロールで泳いだり、平泳ぎをしたりしていた。若い女の子たちとおしゃべりしたり。背が高くまだ髪が豊かだった英夫は、かっこよく見えたらしい。妻や息子には厳しい顔ばかり向けていたのに。

　更衣室で着替えると、体がぽかぽか暖かかった。気だるい感じはあったが、快い疲れが手足を満たしていた。少年らしくなったようで、やり遂げた気持ちにひたっていた。英夫はいつになく優しい表情を見せた。

「お腹がすいただろ」

　売店で焼きトウモロコシを買ってくれた。甘くてしょっぱいタレ

が、粒からはじける汁と混じり、口の中が幸せでいっぱいになった。貴志は男っぽく、がぶりとかじりついた。英夫は小気味よさそうに、息子の食べっぷりを眺めていた。少しは泳げるようになったし、お父さんも喜んでいるし、つらいと感じた特訓がうまくいき、これでよかったんだと思った。

うちに帰ると、カレーライスの香ばしい匂いがした。母淑子が太平洋航路のコックから習ったという豚肉のカレーで、小麦粉とカレー粉でルーを作ることから始まる。玉ねぎもみじん切りと角切りに分けて炒める。牛乳を入れるといったん白くなるのが、煮込むうちにカレーの色となるのが不思議だった。貴志の大好物で、インスタントカレーしか作ってもらえない従妹いとこは、「伯母さんのカレーが食べたい」と、いつもうらやましがっていた。

ヒグラシが悲しげな声で鳴いている。薄暗くなってきたので、電灯をつけると、葉陰で休んでいたヤブ蚊が、一斉に居間に侵入してきて、かすかにうなる羽音を震わせた。暑がりな上に網戸を鬱うっ陶とうしがる英夫は、淑子がいくら頼み込んでも窓に網戸をつけることを許さなかった。

「貴志、蚊取り線香をつけてちょうだい」

母に言われて緑の渦巻きに火をつけた。マッチを擦するのはまだ上手ではない。硫い黄おうの臭いも苦手だった。喘息の息子がいる家なのに、煙を漂わせなければ、かゆくてご飯も食べていられない。電球に向かって突撃した蛾が、お膳の上に墜落してくることもあった。

機嫌がまた悪くなった父は、マッチを擦った。ぐっと吸って先が赤くなると、居間は紫の煙で満たされていく。海軍で覚えた煙草は、どんなことがあってもやめられない。すべてのイライラが、一服でやわらいでくるからだった。貴志は胸苦しくなりそうで、公園で遊んでいる妹を呼びに行った。

家族四人そろったところで、カレーを食べることになった。ただ、父の不満そうな顔は変わらない。手作りのカレーに精を出す余り、母はビールを冷やすのを忘れてしまったのだ。生ぬるいビールを一口飲むと、苛いら立だたしげにコップの底でお膳を鳴らした。

貴志はびくっとした。張り詰めた空気に無頓着なのは、幼稚園児の美穂だけだった。着色料で真っ赤な福神漬を、スプーンですくうと「女の子のおしちんこ」とか言って、一人で笑っている。

張り詰めた空気を融とかそうと、淑子は震える頬ほほで作り笑いをすると、貴志の顔を見つめて話しかけた。

「今日は良かったわね、お父さんに泳ぎを教えてもらって……」

救われたような気がして、貴志はうなずいた。水が怖くなくなったのが大きな進歩で、ちょっと自慢したくなっていたからだ。ぼくだって泳ごうと思えば泳げるんだ。得意な気分になって口を開こうとしたときだ。

いきなり、英夫は立ち上がった。何が父を怒らせたのか。ビールが冷えていなかったからか。それとも、詩を書いてる最中に、泳ぎを教えてあげてと、母がお願いしたことが許せなかったからか。何が起ころうとしているのか、貴志には察しがついていた。引き留めようと淑子が立ち上がると、英夫は振り払うように、大股で玄関へと向かった。

「あなた、どうして……」

「うるせえ」

貴志は母の後ろを追っていた。黒い鉄の門を力任せに開ける音がした。鈍く不快な金属音に、淑子はめまいがしたように、柱に身をもたせかけた。母を気遣って顔を覗き込むと、門の方に駆けていった。父は肩を怒らせて坂道を下っていく。声をかけても無駄だった。何かが父に取り憑ついてしまったのだ。昼過ぎに廊下で貴志が寝っ転がっていたとき、父を駆り立てたあの力が。

そのとき、白んだ夏の夕空の南側から、けたたましい、ピチピチピチピチという音が、うねるように近づいてくるのを感じた。何百、何千という鳴き声の渦だった。かわいいなんてものではない。空を覆い尽くす小鳥は、巨大な怪魚のように身を躍らせ、地上の犬や猫、人間でさえも圧倒してしまう力で、群れの意志を誇示していた。自分をおびやかしている、目に見えない暴力が、小鳥の襲来という形で姿を現しているのか。通過して北の丘にある巣に戻るのに、数分もかからないはずなのだが、延々と鳥の濁流が逆巻くよう

に感じられた。

　淑子の顔は青白くなっていた。お母さん、大丈夫？　と声をかけようと思ったが、無言で片付けをしているさまを見れば、母がおびえているのは確かだった。大好きなカレーライスは冷めてしまったが、おいしさは余り変わらない。食欲が満たされれば良しとする体が、自分でもいやになった。
　母がぼんやりしているので、木の風呂桶に水を入れた後、勝手口の三和土たたきにしゃがむと、釜のガスに火をつけることにした。貴志はまだ慣れていない。プロパンガスが回る前にマッチの火を近づけても、木の軸は燃え尽きてしまう。ガスが来るのを待って近づけると、ボッと大きな音がして炎が上がり、貴志は思わずのけぞってしまった。
　淑子は無言で皿やスプーンを洗っていた。英夫が口をつけたカレーライスは、サランラップをかけて冷蔵庫にしまい、飲みかけのビールはぬか床に入れた。食事の後は、いつもは母が美穂のことを風呂に入れるのだが、今日は貴志が一緒に入ることになった。妹となんか入りたくなかったが、美穂はおしゃべりする赤ちゃんみたいなもので、お兄ちゃんと入はいれると言ってはしゃいでいた。
　自分一人なら熱いのを我慢して、股を小さくして入るのだが、妹と一緒だと無理なので、水をたくさん足してしまった。後で沸かし直さなければならないので、母にしかられるのは分かっていたが。
　美穂は貴志の膝に乗ってはしゃいでいた。タオルを湯船に入れ、空気を包んだまま沈めると、中からブクブク泡が出てくる。
「美穂がおならした……」
「違うよ、違うよ、お兄ちゃん！」
　美穂は満面の笑みを浮かべている。髪の毛をなでたとき、そのまま妹をお湯の中に沈めたら、と思った。プールで英夫にされたように。美穂に泳ぎを教えるんだったら、父は手荒な真似はしないだろう。それに、自分から洗濯機の渦の中に飛び込むような妹だから、水を怖がる意識なんかハナからないんだろう。口からプクプク泡を出して、お魚ごっこでも始めるんじゃないか。

　風呂から出てくると、淑子は美穂に駆け寄って、バスタオルで手早く体をふくと、パジャマを着させた。貴志は素っ裸を母に見られてしまったのが、ちょっと恥ずかしい気がした。父に似てよく汗をかくので、あわててパジャマを着たら、生き地じがしめってしまう。念入りにふいてから着ると、母と美穂、自分が寝る部屋に移動した。
　二人が風呂に入っている間に、母は雨戸を閉めると、鴨居に金具を引っかけ、蚊か帳やをつるしていた。ヤブ蚊が我が物顔に飛び回る家では、中に入らなければ体をデコボコにされかねない。引っ掻かくと膨らんだ丘から、血の吸い物が噴き出してくる。自分の部屋で蚊帳なしで寝る父が、蚊に刺されても眠れるのが不思議だった。酒臭くて蚊の方が逃げ出すのか。それとも、蚊に刺されても気づかないほど、ぐでんぐでんに酔っているからか。
　貴志は蚊帳が嫌いではなかった。いつも押し入れにしまってあるので、こもったような臭いがしたが。蚊が入らないように、蚊帳の縁ふちを波のように揺らすと、すかさず中に潜り込むのだ。後から美穂も続いてきた。妹は真ん中に陣取ると、タオルケットをかぶって、端から顔を出したり引っ込めたりしている。何だ、自分一人で「いないいないばあ」でもやってるのかと思ったら、いびきをかいて眠ってしまった。
　貴志は仰向けになると、首の所までタオルケットをかけた。蚊帳を通す常夜灯の光はほの暗く、垂れ下がった網に包まれた世界は、靄もやがかかったようにぼんやりしている。西洋の王様やお妃きさきのベッドには、決まって蚊帳がかかっていた。外から隔てられた別世界では、裸で何をしていても、外からは見えないはずだ。空想する自由を羽ばたかせ、よく分からない大人の世界を思うと、背せ筋すじがぞくぞくしてくるのだった。
　居間の方から蚊取り線香の煙が漂ってきた。貴志は鼻がむずがゆくなり、胸が締めつけられる気がした。仰向けだと息が苦しくなりそうだ。妹の方に背を向け、タオルケットを肩までかぶると横向きに寝た。母はお膳の前に正座して、家計簿でもつけているのか。鉛筆のカサコソいう音が、庭の鈴虫の音ねと入り交じっている。父が

出かけてしまったので、眠るなら今のうちだろう。母が早く寝かせようとしたのは、見せたくないものがあるからだろう。目をつぶりながら、何もなかったように、朝が訪れることを願っていた。

　夢を見ているのか起きているのか分からなかった。体調の良くないときは、決まって眠りが浅くなり、断片的なイメージがよぎったり、意味不明の話に思い悩んだりするのだった。霧がかかった中から、母方の祖母、小金井サチの浅黒い顔が見えた。場所はどうやら母の実家らしい。仏壇から線香の煙が立ち上っている。冷たい表情のまま、何か延々と諭しているようだった。そばにいるのは母淑子なのだろう。
「子供なんか堕ろしてしまいなさい……」
　堕ろすという言葉が何を意味するのか、貴志には分からなかったが、子供を産まないということぐらいは見当がついた。恐らく、父と母の仲がうまくいってないからだろう。母は目に涙をいっぱいためていた。ぼくは生まれるべきではなかったんだ……。さびしい気持ちになった。自分は求められて生まれたわけではなかったのか。
　父英夫の顔が見えた。こわばった表情のまま、祖母と母の方に目を向けている。何もかもいやになってしまい、小金井の家から飛びだそうと思っているんだろう。
「ついて来なくてもいい」と父が告げると、母淑子は声を上げて泣き出した。さびしいばかりだった貴志も、胸苦しくなってきた。蚊の鳴くような音が息から漏れている……。
　目を覚ますと、前に蚊帳がつり下がっていた。腕を伸ばして目覚まし時計を見ると、午前一時を回っていた。横になってると苦しいので、体を起こして蒲団に座った。貴志は思い出していた。父は飲み屋に行ったはずだ。あれから何があったんだろう？　どうやら父はもう帰ってきてるようだった。風呂場の方から、軍歌なのか演歌なのか、聞いたこともない古めかしい歌が、ひどく音程の外れた声で聞こえてきた。それでも本人は熱唱してるつもりらしい。コンクリートの壁に反響して、エコーがかかっている上に、酔っている人間にはすべてが都合良く聞こえるんだろう。あんな大声で歌ってい

たら、隣りのうちも目を覚ましてしまうに違いない。
　母がやめさせようと、ひたすら懇願している声が聞こえた。近所迷惑になるだけではない。泥酔してからの入浴は、命取りになりかねないものだから。母淑子を助けたい気持ちはあったが、父に首根っこをつかまれ、水に沈められた記憶がよみがえり、蚊帳の中から飛び出す勇気はなかった。
　気持ちよく歌っていたところに、母にやめるように言われ、さらに、風呂桶から引き出されそうになったからだろう。
「うるせえ、このくそったれババア！」
　英夫の怒鳴る声がした。バシャンというお湯の音もした。プラスチックの手桶が、コンクリートの床にコーンと落ちた。びしょ濡れになってしまったのか、母淑子は居間の方に戻ってくると、たたんであったブラウスに着替えはじめた。声をかけようとしたとき、母が震えながら、泣いていることに気づいた。
「何で、何で、お父さんは……」
　貴志は自分の無力がいまわしかった。もっと大きくなったら、父に反抗したり、母を守ったりしてあげられるのに。なぐさめたかったが、泣いてるところを見られたことで、母はさらに傷つくことにならないか。タオルケットをまといながら、身を縮めていることしかできなかった。
　蚊帳の外で起こってることが、夢の続きに過ぎなければ、どれだけ良かったことだろう。ぼんやりした薄明かりの中で、すやすや眠ってる美穂の寝顔を見ると、何も知らないということが、うらやましくてならなかった。
　そのとき、風呂場の方で物音がした。父が出てきたんだろう。舌打ちするような音が聞こえた。はだしでドカドカ歩き回っている。バスタオルがそばに置いてなかったのか。母を女中のように考えてた父にとって、タオルと下着の支度を忘れるとは、夫を軽んじる証拠のように思えたんだろう。
「おい、どうした、来い！」
　むせび泣いていた母は、気を取り直して風呂場の方に向かった。着替えているのか、しばらく大きな音は聞こえない。このまま寝か

せつけてしまおうとしているのか。
「迎え酒だ。ビールを出せ。水割りでもいい」「今、何時だと思ってらっしゃるんですか。貴志や美穂も起きてしまいます……」
　静かになったので、このまま朝になってくれればと、貴志は祈るような気持ちになった。台所と父の部屋の間の戸が開く音がした。父が蒲団の上で横になったら、悪夢は終わるはずだった。
　しかし、何か小声でしゃべってる。耳を澄ますと、母が泣いているのを、父がとがめているようだった。
「何で泣いてる、お前が悪いんだろ。世間の父親と俺を比べやがって……」
「貴志に水泳教えてくださいって言ったのが、どうして悪いことなんですか！」
　母はこらえきれなくなったのか、悲痛な叫びのような声を発した。その途端、蒲団に横たわっていたらしい父が、ドタンと畳を打つように立ち上がった。殺気を感じたのだろう。母が逃げ出して、重い戸に肩をぶつける音がした。
「このアマ、口答えしやがって。思い知らせてやる！」
　貴志は蚊帳から飛び出した。このままでは母がどうにかされてしまうと思ったからだ。「俺はタマシイヲケガサレタんだ！」
　父が何を言っているのか、そのときの貴志にはよく分からなかった。ただ、母に暴力を振るおうとしていることだけは確かだった。
　母は勝手口から逃げ出そうとしていた。三和土たたきに下りるときに、足をくじきそうになった。サンダルを履こうとして、片方が脱げてしまった。酔っ払ってふらついていた父は、勝手口で母のブラウスをつかんだが、母は振り払って逃げようとした。その拍子にバランスを崩した父は、前かがみになり、勝手口の戸に体を打ち付けた。
　父はこちらを振り返った。浴衣の前がはだけていた。赤らんだ胸と、猿股の下のすね毛がひらりと見えた。体からだ中じゅうが怒りに震えた父は、タマシイヲケガサレタという言葉を、呪文のように口走っていた。
　貴志が勝手口から飛び出したとき、母は階段の前にある柿の枝に

つかまると、そのままつんのめってしまった。もう一方のサンダルも脱げて、裏返しになっていた。はだしの父が追いついて、その上に馬乗りになった。余りの出来事に、貴志は震えて近づけなかった。母を助けなければならなかったが、赤鬼のような父にすがりついても、後ろに投げ飛ばされるのが落ちだった。

　英夫は淑子の首を絞めていた。タマシイヲケガサレタ、タマシイヲケガサレタと、繰り返しながら、首を絞めていく。苦しそうにもだえていた母が、息絶えそうな声を漏らしたときだ。

ーお母さんが殺される！

　貴志は心の中で叫んでいた。いくら心で叫んでも、恐怖で体が動かなかった。しかし、このままでは、本当に母が殺されてしまいかねない。

「お母さんを殺さないで！　ぼくのせいなんでしょ。そんなにぼくがきらいなら、ぼくを殺せばいいのに！」

　かすれるような声だったが、精いっぱいに叫んだ。息子の絶叫が闇の中に響いた。次の瞬間、英夫に取り憑いていた鬼が落ちたのだった。首を絞めていた手が力なく垂れた。母は苦しげにあえいでいたが、起き上がる力は残っていた。ドタンと英夫は脇で尻餅をついた。

　正気が戻った父は、青ざめて両手を震わせていた。息子と目が合うと、耐えきれずにうつむき、死にたい、死にたいと漏らした。母が起き上がり、腰の抜けた父を起こそうとしている。はだしの貴志も駆け寄り、クラゲみたいになった父を、母と両側から支えようとした。見上げると、西の方に満月が出ていた。白く冷たい光は闇の表おもてを照らしていた。すべて神さまはお見通しなんだなと思った。その後どうしたのかは、貴志の記憶に残っていない。

*

　それから十年余りの歳月が過ぎた。家の東にあった丘は造成され、小学校と団地が建ち並ぶ住宅地に変わっていた。幼い頃に神さまだと思っていた杉の大木も切り倒され、近所の子供たちと遊んだ

塹壕のある草原も、空想の世界でしか走り回ることができなくなった。
　貴志は大学でフランス文学を学び、幼い頃の夢だった作家になりたいという思いを、いまだ捨てきれずにいた。ただ、バブル経済のただ中で、世界第二の経済大国となった日本では、軽けい佻ちょうに振る舞うことが若者らしさだと思い込まれていた。黒い服で渋く決めるのがおしゃれだとされ、夜道でもサングラスをかけて、「こんな世界、見たくもない」と吐き捨てることで、文学青年を装うことがはやっていた。
　そんな世相の中では、貴志はフランスの「新しい小説ヌーヴォー・ロマン」の文体を真似ることしかできなかった。人間の目で見るのではなく、カメラの目で映したような描写に、日本の小説にはない斬新さを感じたからだった。ただ、それにどんな意味があるのか、それを読んで、果たして人が感動するのかといった問題には気づくことなしに。文学を学ぶのではなく、文学を生きて、自分の世界を作り上げるには、経験が圧倒的に足りなかったのである。
　四年間の大学生活は瞬く間に過ぎ、まだ学び足りないとして、大学院でフランス文学の研究を続けたが、モラトリアムで自由な時間がほしいだけだった。留学するほどの語学力もなく、定職もなかなか見つからない。それでも、教員を続けながら詩を書いていた父英夫は、文学の研究を続けることには寛容だった。あの人の子に生まれれば、物語を書く勉強もさせてもらえると、生まれる前に思ったというのも、単なる妄想ではなかったように思われた。
　大学三年の冬に、祖母小金井サチが亡くなった。我が強く何でもずけずけ言う祖母を、幼い頃から近寄りがたく思っていたが、男の子が産めなかった祖母は、貴志が孫の中で初めての男の子だったので、「貴ちゃん、貴ちゃん」と言って、お菓子を出してきたり、小遣いをくれたりした。「子供なんか堕ろしてしまいなさい」という夢の中の声は、ただの思い込みだったのかもしれない。自分が求められて生まれたかどうかは、もはやどうでもよいことだった。貴志はすでに自分の足で、人生を歩み始めていたからである。
　出生の謎が解けぬまま、貴志は祖母サチの死に顔を見た。嫌みを

言うのが好きで、生け花を庭に投げ出すような気性の荒さも持っていたが、息を引き取ってしまうと、我欲の垢もすっかり落ちて、仏さまのようにきれいな顔になっていた。静かに逝けたのは、本当はそんなに悪い人ではなかったからか。父英夫と反りが合わなかったのも、似た者同士だったせいだという気もしないではない。
　そして今、定職にもつけずにアルバイト生活を続ける貴志は、早すぎる父英夫の最期と向かい合っていた。母淑子が病院に泊まり込んで、看病に当たっていた。子供たちが大きくなったら別れてやると、固く心に決めていた母だが、夫が入院すると可哀想になり、今度元気になったらと思いながら、結局添い遂げることになった。
　毎晩のように深酒をしていた英夫は、慢性肝炎と糖尿病で入退院を繰り返し、股関節炎で人工関節まで入れていた。一時は杖一本で歩けるようになったが、階段から転落して再手術となった。糖尿病のせいで、術後の傷口がふさがらぬまま、敗血症を併発して、あと数日の命だと医師に宣告されたのだった。
　意識を失う前に英夫が残した言葉が、貴志の心に棘のように刺さっていた。
「詩を書くために、艱かん難なん辛しん苦くを与え給えと祈っていたら、こんな体になっちゃったよ……」
　成人した貴志には、父をとらえていた苛立ちや苦しみが、体感で分かるようになっていた。父が怒りで震えていたり、顔をしかめたりしているとき、どんなに心が痛んでいるかということも。文学の魔力の虜とりことなり、感動させる言葉をつむぎ出すためには、自身の人生さえ顧みないということも。何気なく放たれた言葉が、矢のように胸に突き刺さるということも。
　父は病院の最上階にある集中治療室で寝かされていた。窓からは散りかけた桜の並木が見えた。日当たりがよく、午後にはブラインドで光を遮断する必要もあった。口には酸素マスクをつけられ、股こ間かんには尿道カテーテル、腿ももの傷口にもカテーテル。食事もできなかったので、経管栄養を施そうとしたが、すでに消化機能も失われていた。腎不全のために始めた人工透析も、心臓の衰えから難しくなり、痰がたまると息苦しくなって、吸引してもらう必要

もあった。満まん身しん創そう痍いの軍人のような有様だった。

　すでに意識もなく、目の瞬きもできなくなって、白い結膜も乾き始めていた。ただ、眠っているように見えても、耳だけは最後まで働いているということなので、貴志は少しでも安らぎを感じてもらおうと、「星の彼方に」という曲を、枕元のカセットで小さく流していた。ディズニーの映画『ピノキオ』の主題歌で「輝く星に心の夢を祈ればいつか叶うでしょう」という歌詞がついている。詩人として名をなして、家の東にあった丘に詩碑が建つことを、冗談交じりに話していた父に、一生の終わりに願いが叶った夢を見てほしかったからだった。

　病室の中には、父のほかには貴志しかいなかった。母淑子は買い物に出かけ、妹美穂は夕方に来ることになっていた。そこで動いている物といえば、微かな音を発する酸素吸入器と、ピッピッという心拍数を示す音、呼吸の証あかしである胸の上下ばかりだった。安らかに逝ってほしいと思いながらも、貴志は小学四年の夏休みに、父英夫に水練の特訓を受けたこと、その夜に父が泥酔して、母に暴力を振るったことが頭をよぎるのだった。

　あの日、父が繰り返していた「タマシイヲケガサレタ」という言葉の意味を考えていた。たましいとは一体何だろう。詩を書くためのインスピレーションの源みなもとだろうか。詩神ミューズのことだろうか。書くという行為は、神の創造のまねびであり、修行と同じく時として、家族でさえも足手まといになる。出家するようなもので、足にすがりつく子供を蹴飛ばし、引き留めようとする妻を張り倒してでも、詩神の僕しもべとしての道を歩まなければならない。いつしか自身が神であるかのように思い込み、理不尽な中傷を受けたと思えば、妻であっても懲罰の対象としてしまうのではないか。

　貴志はまだ父英夫から、文学についてわずかなことしか学んでいなかった。聞きたいことが山ほどあったのに、幼い頃は父を恐れ、成長してからは煙たく思って、向かい合ってゆっくり話すことを避けてきた。

　普段は大人しい貴志であったが、父の内面に巣くっていた狂気

を、自身の内面にも認めないわけにはいかなかった。自分が結婚して子供を作ったとき、書くという行為を否定でもされたら、内面に潜んでいた暴力が、この腕を凶器に変えてしまうかもしれない。だから、自分のような人間は、一生結婚すべきではないのだという確信が、日に日に高まってくるのだった。
　ただ、父英夫は結婚して子供を作り、暴君のように振る舞いながらも、終生詩を書き続けて、人間らしく死につつあるのだ。その道がどれだけ困難なものであるかは、全身をチューブにつながれた満身創痍の姿が象徴していた。
　貴志は心に思っていることを、父英夫に伝えたかったのだが、それを声に出して言うことははばかられた。誰かに聞かれているような気がしたからだ。死につつあるたましいには、声に出して語らずとも、伝わるのではないだろうか。分かりますよねと、小声で言って父の手を握った。
　すると、驚いたことに、父の大きな掌が貴志の掌を握り返したのだ。心の中の思いが伝わったかどうかは別として、少なくとも、ここに貴志がいて、大切に思う父との最後のひとときを過ごしているということは。　　　　貴志は英夫の子として生まれたことを、改めて実感していた。あの人の子に生まれれば、物語を書く勉強もさせてもらえる。父は自身の人生をもって、文学を生きるということを教えてくれたのではないか。
　ただ、父のように執筆を続けながら、家族を養っていくような胆力を、貴志は持ち合わせていなかった。喘息という持病を抱えながら、一家の大黒柱となることは容易ではない。だから、一人で書いていくしかないんだ。人を感動させるような物語が描けなかったら、自分が生きた証あかしはこの世に何も残せないことになる。言葉で世界を創造できなかったら、未熟で孤独な人間として死を迎えることだろう。
　かつて朝鮮半島では、未婚のまま死んだ者は「怨魂ウォンフォン」と呼ばれ、葬儀を行わなかったという。土葬が慣習だったのに火葬にされ、骨を砕いて野山に散骨してしまった。墓を作っても、あとを祀る者がいないからだが、先祖を祀るという責務を放ほう擲

てきした者への見せしめだったのではないか。貴志は自分の骨が砕かれて、懐かしいあの丘にまかれるさまを想像した。今は記憶の中でしか歩むことができない草原に。骨の一部は消え去っても、残りは草木を育はぐくむ土となる。自分のたましいは、風となって大地を駆け巡ることだろう。

　幻はふっと現れて消えた。酸素吸入器の微かな音が聞こえた。父英夫の手はいまだに握られていた。肉厚で温かい掌だった。やがてこの手も力なく垂れ、息絶えるときが来るだろう。

　今日が父との永遠の別れかもしれない。美穂と交替するまでは、命は保たれているだろうが。父が誰よりも愛したのは、利かん気な娘に育った妹なのだから。

　次に訪れるときには、並木の桜はさらに散ってることだろう。チューブにつながった機器も止まり、息をする口も、握っている掌も動かず、冷たく固くなってることだろう。生まれたときに授かったたましいも、人生という夢から逃れて、行く宛もなくさまよっていく。そんな日がいずれ貴志にも訪れるのだろう。

あとがき

　この物語は子供の頃の記憶に基づいている。小学校四年生の夏にあった出来事を、多少の脚色を加えて小説化したものである。昭和一桁生まれの父親は、威厳を感じさせる最後の世代だったかもしれない。怖い存在だったのは、戦争を実際に体験し、少年兵として訓練を受けたことが関係するのだろう。それと比べれば、すべては甘っちょろいものに見えてしまったらしい。
　父が亡くなってから、すでに四半世紀が過ぎている。少年時代のあとに、成人してから父の死まで描いたのは、「たましい」の意味を考えるには、それだけの時間が必要だったということである。

　二〇二二年二月十日

髙野敦志